

檀信徒の信仰に支えられる寺檀関係の摸索

〔寺院の教化活動におけるグリーンフ・ケアの可能性〕

片 野 真 省

はじめに

これまでに、檀信徒の立場から、檀信徒のニーズを意識して、宗団教化というものを考えたり、論じられたことがあっただろうか。「檀信徒や社会一般が、どんなことを切実に感じ、何を希求しているのか。」ということに目をこらして、見つめ続けるという姿勢が、過去の宗団教化にあったのだろうか。これまでの論文や議論には、こうした教化の対象となる檀信徒の実像を徹底的にみつめて、檀信徒の心情を思いやったまなざしが、どこかで欠けていたという気がしてならない。「僧俗一体」という言葉が象徴するように、これまでの智山派では、檀信徒や社会一般を「俗にまみれたもの」として、当たり前のように考えてきた。しかし、われわれ「僧」も同じように、いや、それ以上に俗にまみれたものであるのに、この「僧俗一体」という言葉からは、優越感という意識しか漂ってこない。「僧俗一体」と言う側は、「僧俗一体」と言われる側の心情に、微かな配慮も払ってはいない。

こうしたことを平気で口にするわれわれだからこそ、檀信徒とまじめに語ることなど、苦痛すぎて我慢ならないの

だろう。結局は、檀信徒の顔を、その目を、しっかりと見つめることなどできないから、一方的に、僧侶に都合の良^いい、自己満足の教化を押し付けるとというのが、過去の宗団教化の習慣なのである。僧侶の理屈と常識（世間では常識）を振り撒き続ける、相手の迷惑など顧みない教化が、もしも、存在するのであれば、早くそのウミを取り除かなければならない。

また、自らが寺院で実践する教化活動を、優越感に恍惚の表情を塗^まりて自慢げに語り続ける体験談にも、辟易^{へきえき}とさせられてしまう。教化活動をおこなうことが「善」で、おこなわないことは「悪」であるという理論構造には、弱者へのいたわりがみじんも感じられない。自己満足の話を延々と聞かされても、刺激を受けたり、参考となるものは何もないのである。こうした自己主張を強引にくり返す教化者によって、智山派の教化推進は迷走し、大きく回り道を強いられた感否めない。「教化をおこなわなければならない」という強迫観念を助長し、何もかも一律の「教化」という呪縛に住職・教師を縛りつけてきた、これまでの宗団教化は、この二十五五年間にどんな効果をもたらしたのだろうか。「教化しなければならぬ」という「義務教化」よりも、寺院が独立採算を可能とする、その寺院に適した「自在教化」を目指すことのほうが、「ねばならない」課題と言えるのである。なぜ教化活動をおこなうのか、どんな苦汁をなめたのか、それをどう克服したのか、これからどうするのか、動機・理由・実践・反省・展開が滲^{にじ}み出る教化活動と、自己満足を自慢するだけの教化活動には、明らかな違いがある。

また、対象となる檀信徒があつて、はじめて教化は成立するのである。教化とは、馬に水を飲ませるのは訳が違^ううし、檀信徒は馬ではない。そうした例を用いることが、すでに優越的な教化を自演することにつながっているのである。そして、檀信徒も、社会一般も、宗教者である僧侶に、多くを望んでいない現実のみが、われわれの前に大きく立ちふさがっている。僧侶に救いを求めよう、既成教団の仏教を心のより所にしようなどという現代人は、希少価

値と言えるだろう。われわれが社会から何も期待されないことに、これからも安住し続ける覚悟ならば、宗団教化など騒ぐことは、体裁を気にするだけのパフォーマンスでしかない。そんな道化師のままでいることをこれからも選択するのか、檀信徒と真剣に向かい合って、苦しみながらも、自分の言葉で語ることが心に決めるのか。いま、われわれは、そういう選択を迫られている時代を迎えている。

一、智山派における寺檀関係の実際 ―「つくしあい運動」挫折の背景―

真言宗智山派における寺院の教化活動を考え、語る時には、智山派が宗団教化の推進として掲げた教化運動「つくしあい」と、本宗における寺檀関係について触れなければならない。しかし、「つくしあいの検証」については、平成七年三月に智山伝法院教化研究室が見解をとりまとめており、また、本宗寺檀関係の分析は、智山派総合調査分析研究報告に、その実態が明らかにされている。本論はこうした分析研究を認識した上で、また、教化研究室見解を指示する立場であるため、誌面の都合上、ここでは詳しく言及しないで、これらの見解をご参照いただきたい。

教化を宗団の名の下に運動として展開する場合に、検証・認識すべき実態が幾つか存在する。そして、その実態を把握することなしに運動が展開される場合には、その運動が停滞・挫折・瓦解の道を辿ることは当然の結末と言えるだろう。つまり、実態に応じた「運動展開の必然性（理由）」と「運動展開の方法論」と「運動実践者（人材）の養成」という三つが、明確にかつ、有機的に機能するシステムとして確立されていたかどうか、運動成功の成否がかかっていたのである。けれども、こうした三点を満たす教化運動の展開を目論むこと自体が、智山派の実態を認識していない証明と言えるのかも知れない。なぜならば、教化運動のような宗団教化がおこなえるほど、いまだ、真言宗智山派の組織も機構も成熟しているとは思えないからである。そして、挙宗一致の体制など夢のまた夢であること

を、これまでの智山派総合調査のあらゆるデータが物語っていることはまぎれもない事実である。

さらに、「つくしあい」運動を契機に、宗団教化の展開をはかる目的を掲げたとしても、その目的が、どれくらい本宗の寺院住職・教師に啓発されたのだろうか。むしろ、一方的な強制的運動を推進することだけに終始した結末が、現在の形骸化した年度布教教化方針の決定方法（智山布教師大会）等にも象徴されている。「つくしあい運動・理念」について、実体の無い存続を許容する「体質」に疑問を呈したい。この疑問に対する真摯な応答なしに、また、われわれ智山派に所属する住職・教師に対して、「つくしあいの検証や総括」なしに、二十五年も遠い過去に提唱された幻想的宗団教化運動を、時代状況も加味しないまま、いままなお、押し付け続けるのだろうか。

つくしあい運動を展開する具体的方策として、教化会議（教化推進会議）や檀信徒連絡協議会が各教区・地区で開催されることで、運動の浸透をはかうとしたわけだが、こうした会議や協議会が開かれた教区は、全体の半分にも満たなかったのが事実である。現在、教区講習会が、教区単独でほとんど開催されない現状を見ても明らかのように、現行の教区制度が実際に機能していない実態では、真言宗智山派が教化運動を展開する組織を、教区単位で確立することは、現状を無視しているとしか言いようがない。また、教区講習会等の出席率の低調ぶりは、智山派にとって深刻な問題ととらえ、何らかの対応策を講じる必要がある。

これまでの真言宗智山派総合調査による分析結果において、再三指摘されているとおり、寺院に専業できず、兼職を余儀なくされる住職・教師が、全体の半数近くを占める実態を改善しない限り、宗団教化の推進は現実味を失うことになる。また、兼務寺院問題や過疎化地域寺院問題等、智山派の都市部以外における寺院は、深刻な状況におかれているのである。こうした現状が、つくしあい運動の挫折の大きな要因のひとつであるし、現行の教師研修を低調に終わらせている最大の要因と言えるだろう。

また、つくしあい運動では、二種類の手帳が作成された。ひとつは、檀信徒の各家（各家族）に配付する檀信徒用手帳と、現場において檀信徒につくしあい運動を展開する住職・教師のためのマニュアル（手引書）となる教師用手帳である。このうち教師用手帳には、つくしあい運動創設の必然性、目的、理由、概念から、具体的な教化活動の実践方法まで、詳細な手引が膨大に綴られている。しかし、こうした懇切丁寧な、総花的な手引書がかえって、つくしあい運動自体を敬遠する流れを作り出したとは考えられないだろうか。つくしあい理念のひとつのテーマとして、「家の宗旨から個の宗教へ」ということが掲げられ、個人の一生を通じて教化活動をおこなう「一生の行事」が提示されている。しかし、現実問題として、檀信徒それぞれの一生に、寺院が密接にかかわる実力も、余裕も見いだせないのが現場の寺院の実情である。さらに、それ以前に、寺院が抱える危機的状況と現実の問題を解決すること無しに、檀信徒個人が宗教的信仰を抱き、深める状況へと住職・教師が誘う宗教活動を実践することは不可能であると断言したい。

また、平成二年に実施された智山派総合調査の分析研究に指摘されているように、智山派の寺檀関係が、墓地の存在によって成り立っている実態が、重く深くのしかかっているのである。現実を厳しく見詰め、人質ならぬ「墓質（はかじち）」が、寺院の教化活動の展開を、無意識のうちに妨げていることを、切実に、真剣に検討しなければならぬ。つくしあい運動における網羅的な教化活動の展開に感じられる寺院は、ほんの一握りに過ぎないのである。むしろ、もっと、幾つかの活動について、各寺院が実践できる教化活動・行事を絞り込んだ上で、重点的に徹底するという方策によって教化を推進した方が、この過去二十五年の成果は、違ったものとなったのではないだろうか。

先に述べた「宗教的信仰」、つまり、ここでは、真言宗の信仰ということになるわけだが、この「信仰」を檀信徒がどのようにして抱き、深めるかということは、宗派の一部が議論してとりまとめたものを、寺院住職・教師に押し

付けるような性質のものではない。むしろ、本宗教師のありとあらゆる信仰観・宗教観を議論する中から、コンセンサス（意見の一致・合意）を形成させるような動き（運動・研究会）が是非とも必要なのである。また、各寺院の教化活動や行事によって、檀信徒の信仰を深めることは並大抵のことではないし、さらに、個人の信仰の深まりは、個人に委ねられる性質のものではないだろうか。寺院において可能な教化とは、そうした個人の信仰の形成をフォローアップする程度のものかも知れない。

われわれ教師が寺院において、行事や教化活動を通じて檀信徒にできることは、宗教的感動をもに分ち合うことぐらいではないだろうか。檀信徒と悲しみを分かち合い、喜び（感動）をともにすることがせいぜいである。そうした機会をなるべく、出来る限り多く、檀信徒に提供することが、寺院が主体となる教化の本質と考える。

二、寺院（住職・教師）と檀信徒とのコミュニケーションの要件

檀信徒と宗教的感動を分かち合うために、どのような教化活動を考えればいいのか。そのためには、まず、それぞれ各寺院が、寺檀関係の内容を再検証してみることが第一歩であろう。これまでに慣例的（伝統的）に行われてきた行事や教化活動を、いきなり、何もかも変えてしまうことが、なかなか難しいのは当然のことである。しかし、既に述べたように、智山派の寺檀関係において、檀信徒の信仰心や宗教的感動を喚起させることを意識して、教化活動をおこなっている寺院を探すことは、なかなか難しい。檀信徒の意識や動向に注意を払い、教化活動の質的転換を、いつも、うかがうだけの姿勢を保ち続けることは、かなり、難しいと言わざるを得ない。

「墓質」、つまり、墓地を有していれば、宗教活動の質はさして問われることもないし、檀信徒も菩提寺に対して、それ以上もそれ以下の期待もしていない。このことは前述のとおり、平成二年総合調査による分析研究から指摘され

ていることである。智山派檀信徒の多くは、智山派寺院に「信仰のよりどころ」としての存在価値を求めている。そして、この檀信徒の意識に良くも悪くも、智山派の寺院住職・教師が安住していることを否めない事実を、こうしたデータが物語っているのである。

また、もうひとつ注意すべきデータがある。これは、智山勸学会の奨励助成研究グループのひとつが、平成五年度に実施した調査研究において、「グリーフ・ケア（悲しみの癒し）」をテーマとした研究成果がある。この研究グループは、葬儀という儀礼のもつ意味を探ることを目的として、「親しい家族のひとりや亡くした遺族が、葬儀を執行する僧侶に何を求めているか。」ということを究明するものであった。この調査研究の成果について、ここで詳しく触れることはできないが、この時に遺族が、われわれ僧侶に求めているものは、彼らの心の悲しみをケアする（和らげる）ことではなく、単に、「故人を迷わず成仏させて欲しい。」「葬送儀礼をきちんとこなして欲しい。」ということである。

悲しみに暮れる遺族に、宗教者と自負するわれわれが、引導作法を厳かに執行することのみが望まれているこの現状を、われわれ自身、どう受け止めればいいのか。『物の時代から心の時代へ』『仏教こそがこの時代に人の心を豊かにする』ということを経信徒に布教し続けてきた僧侶は、具体的にどんな宗教活動を通して、人々（檀信徒）に安らぎの心と宗教的感動をもたらしているのだろうか。

われわれには、宗教者として人々に果たすべき役割があるはずである。しかし、われわれは、われわれ自身の手で、時代の流れとともにその役割のひとつを放棄しているのではないだろうか。そうした僧侶のそのまゝの姿が、世間から何も期待されない無宗教・無信仰の文化を形成する強烈なアシストをしているように思えてならない。こうした危機的状況をわずかに認識しながら、自戒と反省の立場から、これまでの寺檀関係からの質的転換をはかる

試みと挑戦を繰り返さなければならない。

まず、寺檀関係には、何より「寺院と檀信徒のコミュニケーション」が問題となってくる。檀信徒のありのままの姿をよくみつめるために、檀信徒が何を希求しているのかを知るためには、檀信徒とのコミュニケーションをどのようにはかってゆくかが、寺院における教化活動の基本となる。しかし、現在の多くの寺院がそうであるように、閉鎖的・消極的で、寺院に檀信徒が来るのをただ待っているだけでは、コミュニケーションなどはかされるわけもない。そこで、ここでは、寺院と檀信徒のかかわり、そのあり方を、もう一度、よく見つめ直してみたい。檀信徒とのコミュニケーションをはかる寺檀関係の質的転換として、寺院の教化活動の内容を次のように整理・分類しておきたい。

a、オープン——寺院が開かれていることを、誰もがわかるまで知らせるために活動する

▼ 相談活動（相談室の定期開設）／子供会（遊び場提供）

サークル活動（教化行事・老人会等）／日（土）曜学校他

※地域周辺社会へ活動参加する

b、アプローチ——檀信徒に対して、さまざまに具体的な方法で働きかけて入り込む

▼ 文書伝道（寺だより・新聞・リーフレット・パンフレット等）

揭示伝道／通夜・葬儀・初七日（法話・信仰相談）・棚経・月参り他

※仏教に対する理解・イメージを深めていく

c、アクセプト——寺院でおこなわれる行事・活動に、檀信徒を招き入れる

▼ 発心式（承継式）／法話／伝統的行事／教化的行事／相談活動他

※宗教的感動を体験させる

ここで提示した三つの活動形態は、簡単に言えば、「開かれる（オープン）」「働きかける（アプローチ）」「招き入れる（アクセプト）」ということになる。この三つの活動形態をうまく連動させることで、これまでにおこなわれてきた伝統行事や教化活動を、活性化させ、効果的に機能させることが可能となるわけである。そして、勿論、こうした教化活動には、「檀信徒と宗教的感動を分かち合う」ということが前提となる。

さらに、寺檀関係の質的転換をはかるために大切なことは、寺院住職・教師と檀信徒をつなぐ宗教的情緒を模索していくことである。このためにどんな具体的な活動を実践するかが課題となるわけだが、その時の寺院における活動の目的を次のように整理してみたい。

- ① 信仰を発生させる契機となる宗教的感動をもたらし活動（儀礼）
- ② 祈りを継続（日常化）する行事・活動（儀礼）
- ③ 安心を維持するために必要な宗教的感動をもたらし活動
- ④ 悲しみを癒す儀礼と活動

教化活動には、本来、必ず、その活動をおこなう目的と具体的内容が存在しているはずである。その教化活動が、檀信徒に何をもたらしのかを再チェックすること、各寺院がおこなっている教化活動の活性化を実現するためには、教化活動の内容と目的が明確となるよう再検討してみる必要がある。寺院が教化活動をおこなう場合、その活動が「開かれる」ものなのか、「働きかける」ものなのか、「招き入れる」ものなのか、そして、「檀信徒にどのようなことをもたらしものなのか」ということを、再考して見る必要がある。そうすることによって、檀信徒との新しいコミュニケーションが開かれ、教化活動の活性化が可能となると思われる。あれもこれも、教化活動と思われるものをすべておこなう必要はまったくない。その寺院が置かれた環境に適した活動を、目的・方法を明らかにして、簡潔に実践

することが、檀信徒とのコミュニケーションをはかる上で、最短距離を歩むことになるはずである。

三、檀信徒の信仰心をケアする教化活動の模索

さて、寺院の視点から、檀信徒にどのようなにかかわるか、檀信徒とのコミュニケーションをはかる場合に、どのようなことに思いを巡らすかについて考えてみたわけだが、次に、檀信徒が宗教的感動を得る機会について考えてみたい。ここでは、ひとつの具体的な場面を想定して、檀信徒の信仰を育む契機としての教化活動について少しばかり考えてみることにする。

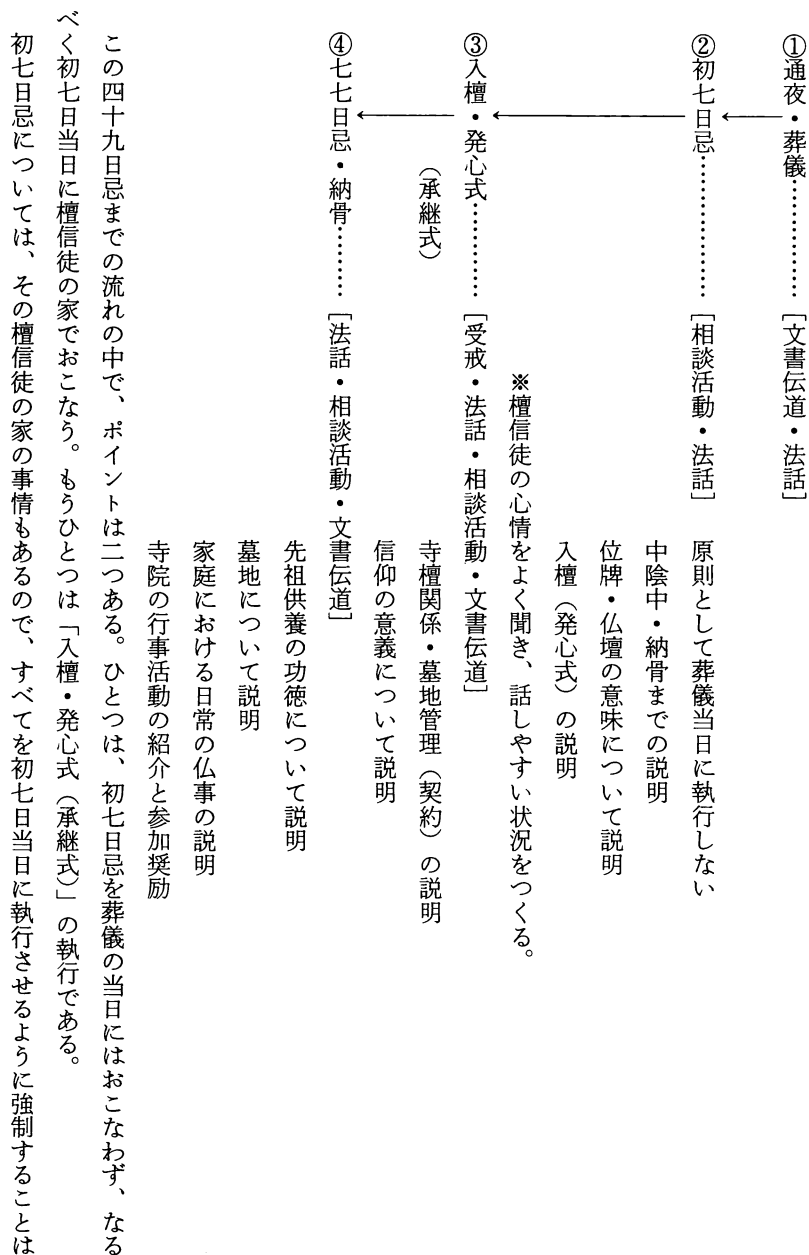
檀信徒が自分の菩提寺を意識する時とはどのような場合だろう。勿論、その契機はさまざまだろうが、一つには、やはり「死」というものを考える時ではないだろうか。自分の親が死を迎えようとしている時、または、自分の死期を実感した時には、「自分（達）」が世話になる場所（菩提寺・墓地）」として、寺を意識することになる。そして、特に、自分の親が死んだ時には、菩提寺とのかかわりは、直接的かつ、現実的なものとなるはずである。それまでは、菩提寺とのかかわりや仏事は、親任せであったものが、「親の死」を契機に、すべてのかかわりが自分に降りかかって来ることになる。これまでも、「通夜・葬儀」の場が最も効果的な教化の場」と言われてきた。確かにある側面からはそういうことが言えるかも知れないが、これだけではあまりに、菩提寺の立場からの傲慢な発想となってしまう。勿論、通夜・葬儀という機会は、菩提寺の側から見れば千載一遇のチャンスかも知れない。しかし、この機会をここでは、親しい人を亡くした檀信徒の立場から、檀信徒の心をケア（援助）することを目的として、アプローチをはかる取り組みを考えてみたい。

この十数年来、都市部における寺院の葬儀事情で特徴的なことが幾つか挙げられる。それは、ひとつには、通夜・

葬儀の簡略化が進んでいること。そして、この簡略化の起因とも言えることだが、葬祭業者（葬儀屋）の役割が拡充され、僧侶の役割が追いやられ、縮小されつつあるということである。最近では、都市部だけではなく、地方にもこうした傾向がうかがえる。葬送儀礼の簡略化について、もう少し具体的に言えば、葬儀後出棺前の「最後のお別れ」に立ち会わない点、初七日を葬儀当日に執行する点等が挙げられる。通夜・葬儀に関する打ち合わせや段取りは、すべて葬祭業者が一切を仕切り、通夜・葬儀の司会進行をおこない、葬儀の時間までを指示する。当然のことながら、現実問題として寺院と葬祭業者は、共存共栄しなければならないわけだが、寺院住職・教師の側が、葬祭業者にもたれ過ぎ、多くを委ね過ぎていないだろうか。

檀信徒の通夜・葬儀は、寺院住職・教師が檀信徒と接して、その家族・親族と直接向かい合える格好の機会（不謹慎かも知れないが）である。この時に、菩提寺が檀信徒に果たす役割は、さまざまに存在すると思える。これまで仏事のことには、まったく無関心である檀信徒に、また、悲しみに暮れる親族に、あらゆるかたちで、われわれがケアできる（かかわれる）可能性が多く存在しているように思えてならない。こうした菩提寺に対する認識を抱かせる（役割を担える）絶好のチャンスを見すみす見過ぎすわけにはいかないのではないだろうか。

それでは、この好機をどのように生かすことができるのか、その可能性のひとつを提案してみたい。通夜・葬儀から四十九日の忌み明けまでに、檀信徒（遺族）とのコミュニケーションをどのように深め、檀信徒をケアしてゆくか。その流れを次のとおりに考えてみることにする。ここに示す試案が、智山派のすべての寺院において有効に機能するわけではない。それぞれの寺院には、さまざまな事情、地域の慣習等が存在するのであるから、あくまでもひとつのケースであることをご理解いただきたい。



できないが、なるべく初七日当日の執行をすすめる。そして、初七日に遺族・親族と対話する時間を持ち、その悲しみの気持ちを少しでも聞き、その心情に理解を示すことができれば、それがグリーン・ケアのほんの一端になるかも知れない。彼らが心情を言葉にして語り、その話を聞くだけでも、彼らの心のいくばくかが癒^いされる可能性もあるのではないだろうか。直接、話を聞く機会を初七日に持つことの意味ははかり知れないのである。また、初七日忌の機会は、檀信徒が発心式（入檀式・承継式）に臨むための大切な説明の場でもある。今度は、檀信徒（遺族）に菩提寺を訪れてもらって、檀信徒が菩提寺の信者であり、菩提寺が信仰の対象であることを知ってもらうのである。そして、発心式は、檀信徒が発心式という儀礼でもたらされる宗教的感動を享受することによって、悲しみの心を癒し、その心情を信仰心へと導く（転換する）ことを目的とするのである。

真言宗における発心式の意義は、大変深いものであると言わざるを得ない。総本山智積院等における結縁灌頂になかなか参加できない寺院・檀信徒事情においては、檀信徒が宗教的感動を抱ける可能性を秘めた数少ない儀礼である。小人数による厳粛な雰囲気の中で、自身とご本尊さまのかかわりを心に刻みつける機会となる儀礼は、真言宗檀信徒としての信仰のスタートとするにふさわしいものである。そして、宗団教化としては、こうした檀信徒の宗教的感動を喚起する儀礼を寺院に徹底するような方策であれば、各寺院に受け入れられやすいのではないだろうか。こうした宗教的感動を生み出す儀礼を、檀信徒の信仰の起点となる教化行事として、より鮮明に位置づけることは、これからの智山派の寺檀関係において重要な意味を持つと考えられる。

しかし、だからと言って、こうした檀信徒の信仰カリキュラムが、必ずしもすべてうまくいくとは限らない。そうであっても、檀信徒が菩提寺を意識する機会に、菩提寺から何らかの手が差し伸べられたなら、檀信徒にとって菩提寺の存在は無関心なものではなくなるはずである。そうした好機に手をこまねいて見ているだけでは、菩提寺の存在

意義が、これからさらに、希薄なものへと移り変わっていくことだけは確かであろう。

むすびにかえて

われわれ真言宗の僧侶が、寺院を拠点として檀信徒と接し、さまざまな活動を実践することは、確かに「教化」と呼べるものなのかも知れない。しかし、はじめに「教化」や「教化活動」がありき、ということではないはずである。そして、いま現実に、檀信徒を含む社会一般が直面して、避けて通ることが叶わない問題がさまざまに存在している時に、この現実から目を背けることが、われわれには避けられないことなのである。何も望まれない、何の期待も抱かれないことを幸いとするのか。悲しみや苦しみに暮れる檀信徒に、何らかの働きかけを、できる範囲の中から可能としていくのか。いま、智山派の寺檀関係は、厳しい選択を迫られている真つ最中なのである。

これまでにおこなって来た慣習を、いきなり一八〇度転換することは不可能であっても、その寺院の実情に適したかたちで、寺檀関係の質的転換に少しずつでも取り組むことは、充分に可能なのである。死者に引導を渡すだけの葬送儀礼も、いまの寺院の役割としては大きいものがある。しかし、その一方で、生者が信仰を抱くために、また、信仰を深めるための儀礼もさらに必要なことではないだろうか。

家族関係が希薄化していると言われる現在に、身内の死によって故人との距離（関係）を実感することは少なくともいと思われる。「死」について考え、「死」を実感することによって、現在の「生」が実感され、生命の尊厳が自分のこととして理解できるのではないだろうか。すでに、平安・鎌倉期の文学にみられるように、われわれ日本人は、古くから「死後の世界」に思いを巡らしてきた民族であったと言えるはずである。「人間はどこから来て、どこに行くのか」という問いかけを、われわれはいつも無意識におこなってきたのである。そして、それは、現在に生きている

ことを問ひかけ、実感するためのものであると思えてならない。また、このことに対する自問自答は、その個人の信仰心と深く結びつき、かかわっているのではないだろうか。われわれが心に抱く「信」と、その「信」が表現される「祈る」という行為は、自分自身の「生死」に対する「答えのない問いかけ」と表裏一体を成しているとは考えられないだろうか。

自身の「生死」を、あらためて問ひかける機会に、われわれ僧侶が力になれる状況が生まれているのである。その時に、自問自答する檀信徒のもとへ出向き、その対話の機会を大切にして、檀信徒の語ることに耳を傾ける姿勢を持ち得るなら、彼らの菩提寺に対する認識も違ったものへと移り変わってゆくのではないだろうか。また、これまでの寺檀関係に質的な転換を求める場合、発心式（入信・承継式）という儀礼が、宗教的感動を喚起して、菩提寺という存在価値を深める有効な方策のひとつになると考えることができる。そして、こうした取り組みを、ひとつの流れの中に位置づけた活動こそが、寺院と檀信徒のかかわりを少しずつ確かなものへと変えてゆく可能性を見いだせるのである。

寺院自らの体質を、これまでの慣習の中に埋没させたままでは、何も生まれては来ないし、喪失するものだけがないたずらに増えるのみである。そして、時代の流れの中に、寺院が担うべきはずの本来の役割そのものが埋没しかかっているから、「葬式仏教」という批判を浴び、無抵抗のままに、いままも甘んじているのである。何も望まれない、何も期待されない、過去に類を見ない、これ以上ない怠惰な寺院生活を掌中に収めることと引き換えに、寺院は現代社会から、「無力で無用の長物」という烙印を押されようとしている。